

3 人生の最終段階における医療や療養への希望について

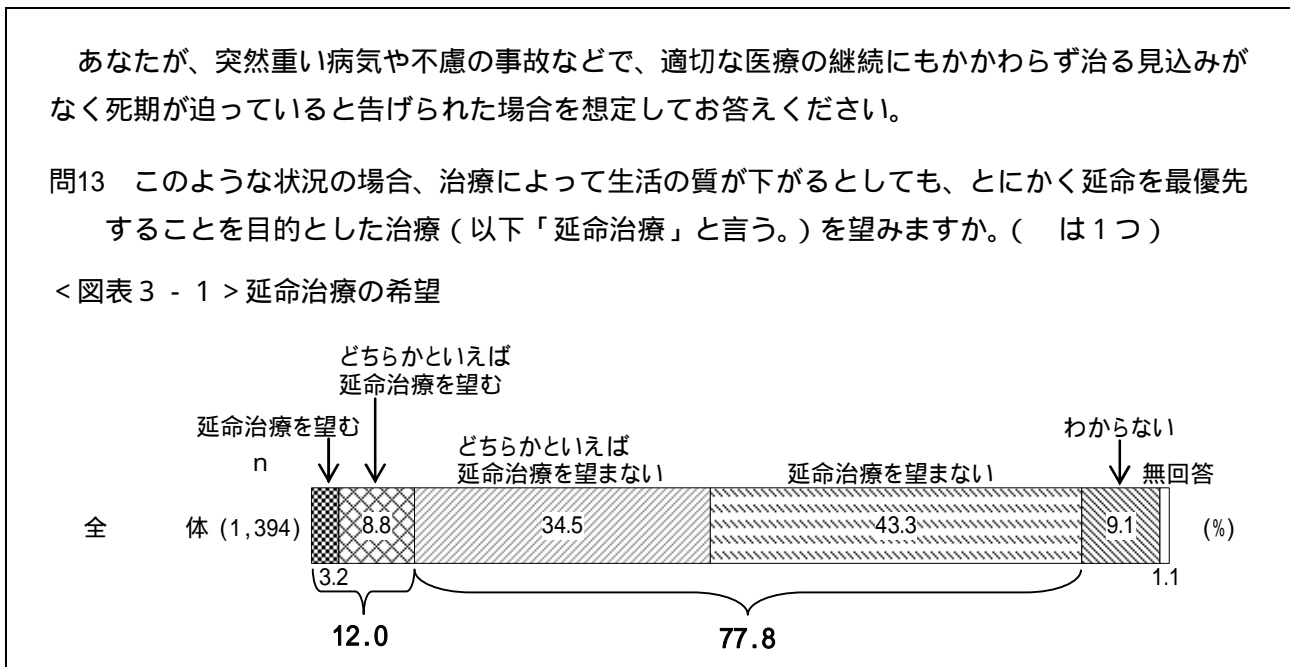
(1) 延命治療の希望

『延命治療を望まない（計）』が約8割

あなたが、突然重い病気や不慮の事故などで、適切な医療の継続にもかかわらず治る見込みがなく死期が迫っていると告げられた場合を想定してお答えください。

問13 このような状況の場合、治療によって生活の質が下がるとしても、とにかく延命を最優先することを目的とした治療（以下「延命治療」と言う。）を望みますか。（ は1つ）

<図表3 - 1> 延命治療の希望



適切な医療の継続にもかかわらず治る見込みがなく死期が迫っている状況の場合、「延命治療」を望むか聞いたところ、「延命治療を望む」(3.2%)と「どちらかといえば延命治療を望む」(8.8%)を合わせた『延命治療を望む(計)』(12.0%)が1割を超えている。

一方、「どちらかといえば延命治療を望まない」(34.5%)と「延命治療を望まない」(43.3%)を合わせた『延命治療を望まない(計)』(77.8%)は約8割で高くなっている。(図表3 - 1)

【地域別】

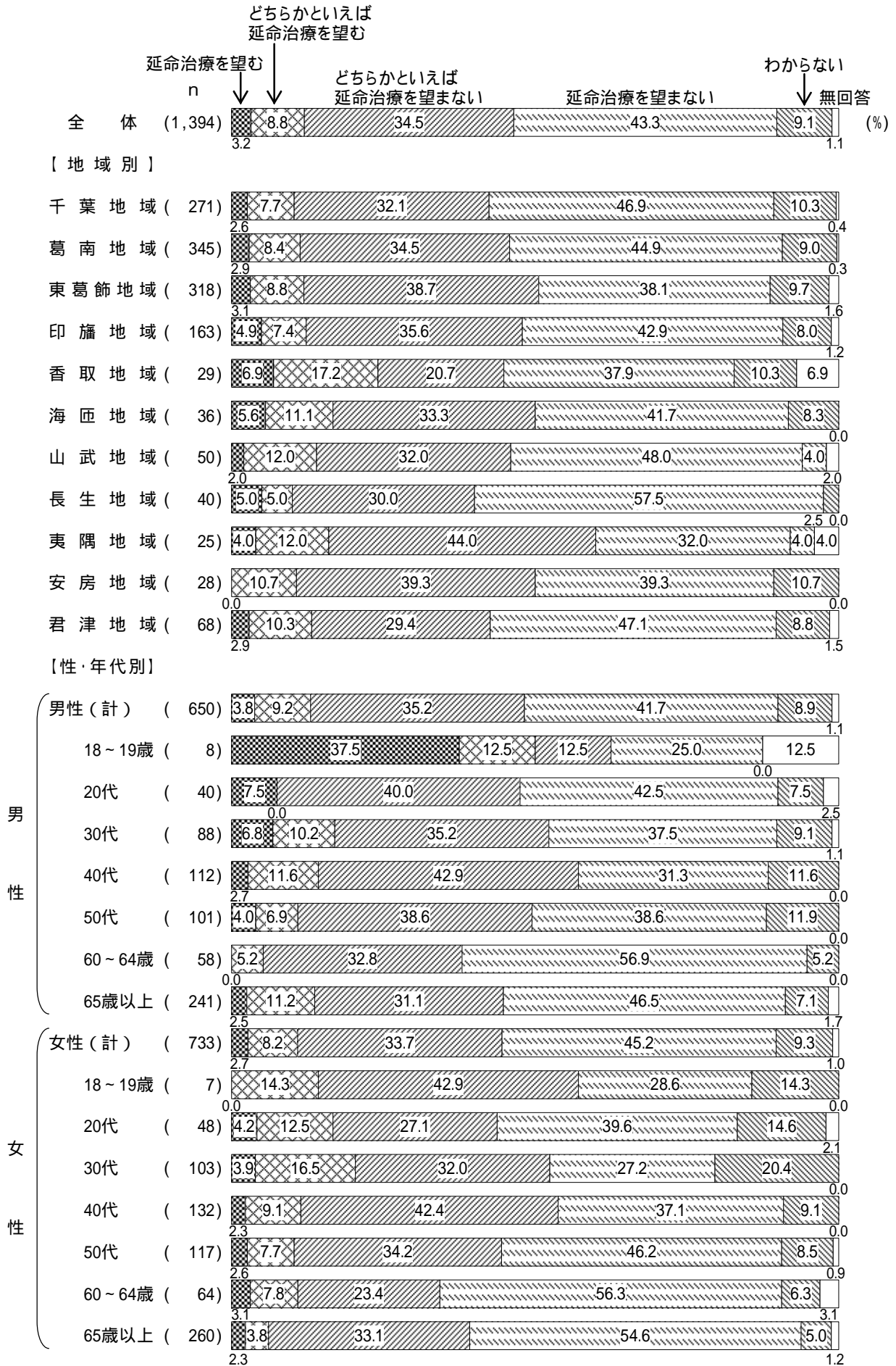
地域別にみると、『延命治療を望む(計)』は“香取地域”(24.1%)が2割台半ばで高くなっている。(図表3 - 2)

【性・年代別】

性・年代別にみると、『延命治療を望む(計)』は女性の30代(20.4%)が2割で高くなっている。

一方、『延命治療を望まない(計)』は男性の60～64歳(89.7%)と女性の65歳以上(87.7%)が約9割で高くなっている。(図表3 - 2)

<図表3 - 2> 延命治療の希望 / 地域別、性・年代別

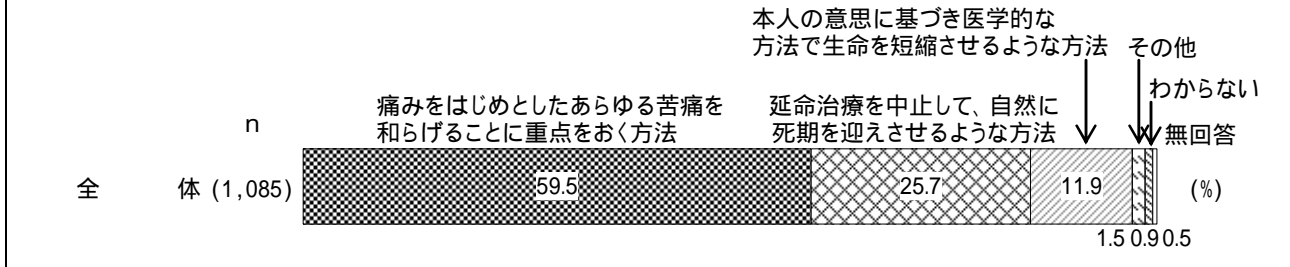


（2）延命治療を望まない場合の医療・ケア方法の希望

「痛みをはじめとしたあらゆる苦痛を和らげることに重点をおく方法」が約6割

（問13で「どちらかといえば延命治療を望まない」、「延命治療を望まない」とお答えの方に）
 問14 延命治療を望まない場合、具体的にはどのような医療・ケア方法を望みますか。（は1つ）

<図表3-3> 延命治療を望まない場合の医療・ケア方法の希望



延命治療を望まないと答えた1,085人を対象に、その場合に具体的にはどのような医療・ケア方法を望むか聞いたところ、「痛みをはじめとしたあらゆる苦痛を和らげることに重点をおく方法」（59.5%）が約6割で最も高く、以下、「延命治療を中止して、自然に死期を迎えさせるような方法」（25.7%）、「本人の意思に基づき医学的な方法で生命を短縮させるような方法」（11.9%）が続く。（図表3-3）

【地域別】

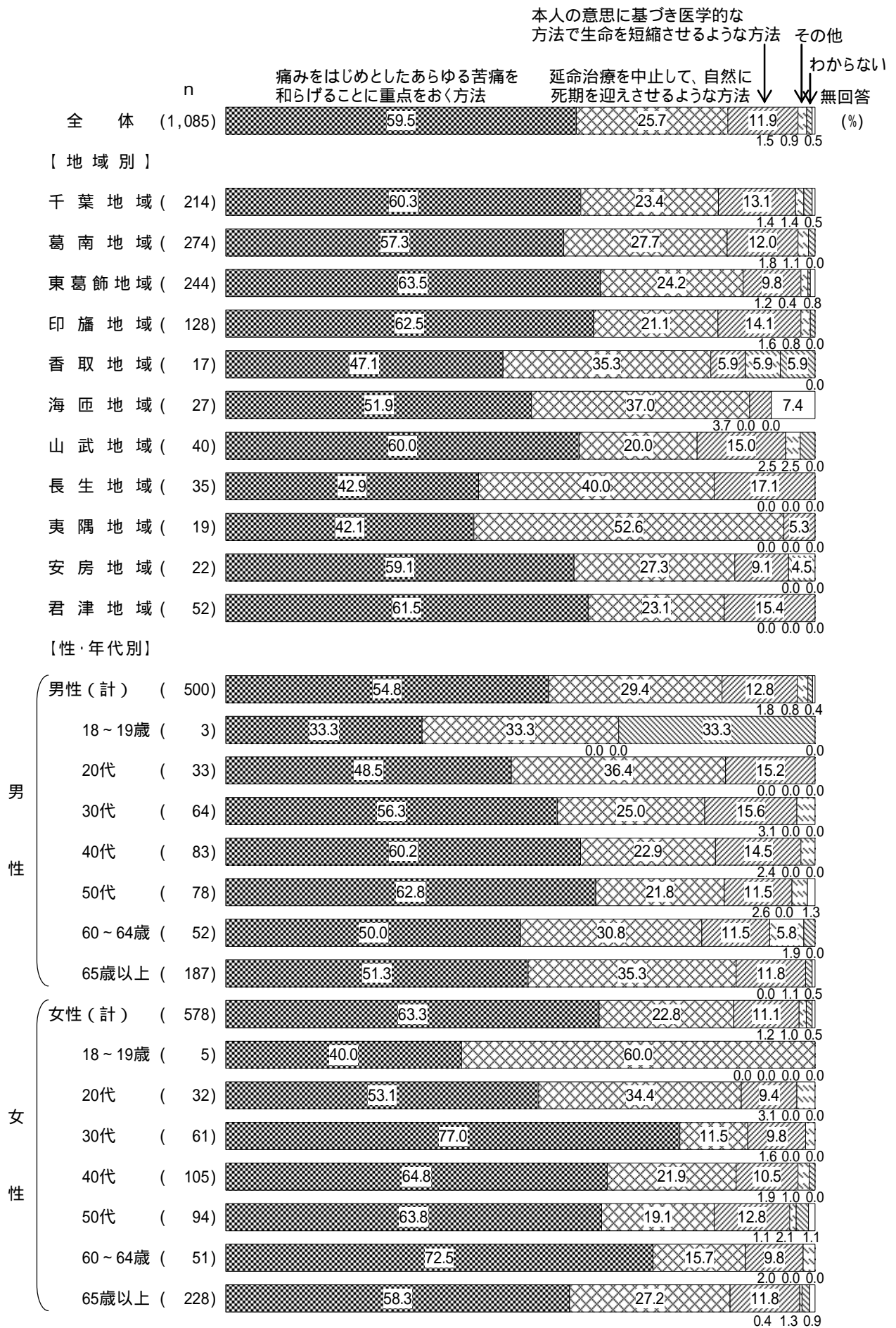
地域別にみると、「延命治療を中止して、自然に死期を迎えさせるような方法」は“長生地域”（40.0%）が4割で高くなっている。（図表3-4）

【性・年代別】

性・年代別にみると、「痛みをはじめとしたあらゆる苦痛を和らげることに重点をおく方法」は女性の30代（77.0%）が約8割で高くなっている。

「延命治療を中止して、自然に死期を迎えさせるような方法」は男性の65歳以上（35.3%）が3割台半ばで高くなっている。（図表3-4）

<図表3 - 4> 延命治療を望まない場合の医療・ケア方法の希望 / 地域別、性・年代別



このほかに、「人生の最終段階における医療や療養への希望について」やここまでの質問（問13～問14）について、ご意見やご提案があればご自由にお書きください。

ご意見やご提案を自由に記述していただいたところ、285人から回答が寄せられた。一部抜粋してご意見を記載するものとする。

「人生の最終段階における医療や療養への希望」の自由回答（抜粋）

ドナー登録カードのような携帯できるカードで、延命治療に対する意思表示ができるようにしてほしい。
（男性、20代、葛南地域）

本人の意思が“延命治療を望まない”としても、家族の判断は迷い、悩み、苦しむことは想像できます。普段の家族のコミュニケーションを深く密にしておくことが重要だと思います。
（女性、60～64歳、長生地域）

ホスピスや在宅看護・訪問診療などの終末期医療について充実したシステムを整備するとともに、積極的に広報し、患者や家族に告知してほしい。
（男性、50代、印旛地域）

画一的でなく、個別的なケアが受けられるような人手の充実した施設で過ごせると助かる。老健などで必要な職員の数の基準を上げなければ、介護職の給料だけ上げて職員は増えないように思う。
（女性、50代、長生地域）

医療機関から本人と家族に対する、つつみ隠さない状況説明、考えられる治療方針の提示と、本人・家族が治療方針を選択できるようにすることが大切だと思います。妻が千葉県がんセンターでお世話になっていますが、そのような環境が整っていると実感しています。
（男性、60～64歳、千葉地域）

法的整備を行った上で、終末期が来たとき、医者任せではなく患者本人の意思を尊重し自ら死を選択できるような終末期医療を検討すべきと考えます。
（男性、60～64歳、印旛地域）

死期の迎え方をひとりひとりの人が考える教育の場が必要だと考えます。また、死期を迎えた人やその家族にわかりやすく説明できる医療関係者の育成も重要と考えます。死期をサポートする人材の育成が進むことを願います。
（女性、50代、東葛飾地域）

緩和ケア、在宅ケアの受けられる施設や支援に力を入れて、地域での受け入れ体勢を整えてほしい。
（女性、30代、長生地域）

日頃より家族でコミュニケーションをとり、考え方、認識の統一をしておきたい。行政が音頭をとるのは難しいかもしれないが世の流れを見ながら、啓発をお願いしたい。
（男性、40代、葛南地域）